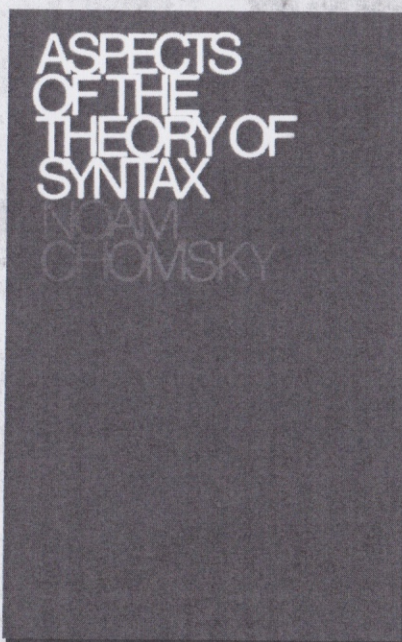


石井 透
(いしい とおる)

チョムスキー 『文法理論の諸相』



Noam Chomsky. *Aspects of the Theory of Syntax*.
Cambridge: MIT Press, 1965.

「諸相」第一章において、方法論に関する議論がありますよね。もし私がいつか「諸相」を書き直すとしても、この部分の議論は、ほとんどいかなる面においても書き直すことはないと思います。」（チョムスキー「生成文法の企て」）

語観は、生成文法が初めて提出したわけではなく、フンボルト、イエスペルセン、サピアなどでも見られる。しかし、生成文法が革命的であったのは、この伝統的な言語観と、チューリング、ペアノ、ポストなどによる数学・論理学の研究成果とを収束させ、「言語は有限の手段を無限に用いるシステムである」というフンボルトのことばに真の理解を与えたことである。こうして一九五〇年代に誕生した生成文法の歴史の中で、『文法理論の諸相』（以下、『諸相』）は、その内容が明確で、しかも示唆に富んでいることが、生成文法研究を飛躍的に発展させた一因とも言われるほどの金字塔的な著作である。『諸相』で提案された「標準理論」の後、「（改訂）拡大標準理論」を経て、「原理とパラメタのアプローチ」の時代に入り、その中で「GB理論」、そして現在の「極小モデル」へと発展していくわけである。このように理論の変遷を表面的に辿ると、生成文法があたかも枠組みを変えることに終始し、その流れの中で、『諸相』も今となっては歴史的価値しかないという印象を持つかもしれない。確かに、生成文法の誕生以来、変化してきたものもたくさんあるが、その一方で、変わらずにそのまま残っているものもまた多く存在する。特に、生成文法の掲げる目標・目的意識に関する根本的

1 チョムスキーとその時代

生成文法は、言語学に革命を引き起こしたと言われる。それは、生成文法が、「言語」を、人間の心の中に実在する言語能力（言語知識またはI言語とも呼ばれる）として、すなわち、母国語話者が持っている自分の言語についての知識として捉えたことによる。もちろん、このような心理主義的言

主張は、その誕生以来一貫している。正にこのことを言い表しているのが、冒頭のチョムスキーのことばである。これは、『生成文法の企て』に収録されている一九七九〜八〇年にかけて行われたインタビューにおけるものであるが、恐らくこの考えは今日でも変わらないであろう。さらに、変化に関しても、それらは恣意的に起きたものではなく、それまでの研究の蓄積の中から、理論の内的必然性に基づき導き出されたものであることを忘れてはならない。本小論では、このような観点から、『諸相』についての所見を述べる。

2 『文法理論の諸相』の概要

『諸相』は四章構成である。第一章「方法論的序説」では、生成文法の背景となる根本的主張について述べられている。まず、言語能力と言語運用の区別についての議論がある。そして、言語運用理論、形式的・実質的普遍性、文法及び言語理論の妥当性、評価の手順、言語習得モデルについて概観している。第二章「統語理論における範疇と関係」及び第三章「深層構造と文法変換」では、『標準理論』における文法のモデルについて、それまでの「初期理論」と対比させながら説明している。特に注目すべきは、文法の内部構成が、統語部

門・意味部門・音韻部門の三部門からなることが、初めて明確に打ち出されたことであろう。このうち統語部門のみが文の生成に関わり、意味・音韻部門は純粹に解釈的であると主張している。第四章「残された問題」では、統語論と意味論の境界設定と語彙部門の構造について、選択制限や屈折・派生接辞に関する現象を用いて議論している。

3 受容・影響の歴史

『諸相』が、生成文法に限らず、言語研究に与えた影響は当然ながら大きい。しかし、注目すべきことは、『諸相』において生成文法の考え方が明確に描き出されたことにより、その受容・影響が言語学のみならず、哲学・心理学はもちろんのこと、それまで言語研究に殆ど関わりがなかった計算機科学や数学などにも及んだことであろう。心理学への影響としては、言語行動の研究における行動主義心理学の限界を指摘し、認知心理学への流れを助長したことが挙げられる。哲学への影響としては、認識論における「経験論—合理論」論争に、言語学という個別科学から合理論的主張に根拠を与えると共に、文法モデルに対して実在論的解釈を与えたことである。これらの主張には、多くの哲学者が異議を唱

え、中でも、チョムスキーとクワインやパットナムとの論争は有名である。計算機科学と数学への影響としては、句構造文法の型がある。『諸相』においても多少の議論が見られるが、階層性のある0/3型の句構造文法を定義し、各型それぞれに、ある種のコンピュータの理論的機械が対応することを発見した。この領域は、現在では言語学から離れ、計算機科学や数学の分野で研究されている。

4 現代的意義と研究課題

4-1 言語能力と言語運用について

『諸相』の第一章では、当時よく見られた生成文法に対する誤解を要約し明らかにしながら、生成文法の方法論についての議論が進められている。ここで指摘されている誤解が現在でも全くなかったとは言い難い中、(皮肉なことであるが)ここでの議論の意義は現在でも大きい。その中でも生成文法の根本的主張に関わるという点で特に重要な、言語能力と言語運用の区別とその関わりについて見ることにする。

生成文法は、言語能力を研究対象とする。これに対して、生成文法は言語運用のモデルであるという根強い誤解がある。言語運用とは、具体的場面において言語を実際に使用する

ることである。この誤解の一因と考えられるのが、「生成」という用語ではないかと述べている。「生成」と聞くと時間軸に沿った過程が存在するかのような印象を持つかもしれない。しかし、「生成」の意図している意味は、(論理学ではない)深いものであるが)明示的であるという以上のことはない。生成文法とは、明示的な、そして明確に定義された方法に従って、文に構造記述を与える規則体系のことである。

さらに、生成文法の研究に対しては、言語能力を重視するあまり、言語運用の研究を軽んじているという誤解もある。この誤解に対して、言語能力に関わる文構造が、言語運用に及ぼす影響についての研究を詳しく紹介している。

- (1) a I [α called [β the man who wrote the book that
you told me about] up]

- b the man [α who the boy [β who the students
recognized] pointed out] is a friend of mine

(1)の文では、 β が α に繰り込まれている。このような繰り込み構文は、(言語能力上の尺度である)文法性は高いが、(言語運用上の尺度である)容認可能性は低い。(1)の容認可能性が低い原因は、記憶の有限性にあることは明らかであり、特に興味をそそるものではない。ここで注目すべきは、(1) aと

(1) bの違いである。(1) bでは、繰り込みがあり、さらにそれらが同型の句(すなわち、関係節)である。これを、自己埋め込みと呼ぶ。このような自己埋め込みは、通常の繰り込みと比べ、容認可能性をさらに低くするという研究成果に基づき、単なる記憶の有限性以上のこと(何らかの形で標示(ラベル)に言及するもの)が、言語運用モデルの(必然的ではない故に興味深い)特性として備わっているのではないかと示唆している。このような(言語能力を対象とする)生成文法を組み込んだ言語運用モデルの研究からのみ、言語運用理論の発展が期待できると主張している。最近のチョムスキーの著作では、言語運用についてあまり詳しく述べられることがなく、その点で、ここでの議論は貴重である。

4-2 「極小モデル」への接点について

『諸相』においては、言語理論(現在では、普遍文法と呼ばれる)と文法(普遍文法と区別して、個別文法とも呼ばれている)の妥当性についての詳しい議論がある。妥当性の概念は、「極小モデル」が何を目指しているかを理解する上で不可欠であり、それ故、これまで以上に重要度が増していると言えよう。言語理論と文法の妥当性のレベルとして

は、記述的妥当性と説明的妥当性がある。文法がその対象である母国語話者の言語能力を正しく記述している時、その文法は記述的に妥当であると言う。そして、言語理論が、記述的に妥当な文法の中から、一次言語資料に基づいて、ある一つの文法を選ぶことが出来る時、その言語理論は説明的妥当性を満たしていると言う（一次言語資料とは、子供が言語獲得の過程で接する外界からの言語的刺激のことである）。言い換えれば、説明的妥当性を満たす言語理論は、子供が一次言語資料に基づいてどのように（個別）文法を獲得するかを説明するものであり、さらには、（個別）文法が何故ある特徴を持つのかというものを説明するものである。『諸相』では、説明的妥当性の達成のためには、可能な文法の形式を制約する（すなわち、選択の幅を狭くする）ことに加えて、評価尺度と呼ばれる文法を選択する装置が必要であると考えられていた。しかし、それと同時に、可能な文法の範囲を十分に制限することによって、一次言語資料と適合する文法が一つしか存在しないという可能性も示し、その際には評価尺度は不要になると述べている。『諸相』では、後者の可能性は、「どのような形で実現できるか」ということは、想像しがたい」として排除している。その後、この可能性は、「原

理とパラメタのアプローチ」の登場により実現され、『諸相』では「夢のような話である」と述べられていた説明的妥当性の達成が現実的な課題になる。そして、『極小モデル』では、（個別）文法の説明理論である言語理論（普遍文法）が、何故ある特徴を持つのかという問いの答えを求めて（言語理論を律する一般法則を求めて）、生成文法が当初から目標として掲げていた説明的妥当性を超えて進むことになる。

次に、『諸相』の議論から考えられる研究課題の一例として、『極小モデル』で提案されている併合という操作について考える。（『諸相』も含めた）以前の生成文法では、句構造を作る操作（『諸相』での句構造規則）と変換規則の二種類の異なる操作が存在すると考えられていた。それに対して、『極小モデル』では、併合というたった一つの操作のみしか存在しないと主張する。例えば、ある構造Xがすでに構築されている時、それにYを併合することによってXを拡大することが出来る。その際にYはXの外部のもの（外部併合）でも（図1）、Xの内部のもの（内部併合）でも（図2）、どちらでも構わない。外部併合が以前の句構造規則に対応し、内部併合が変換規則に対応する。しかし、『諸相』で詳しく議論されているように、句構造規則と変換規則とは数学的性

質が異なる。句構造規則は、その適用が直前の記号列のみに依存するのに対して、変換規則は、直前の記号列のみではなく、それ以前の記号列にも依存する。言い換えれば、変換規則は、記号列に適用されると言うよりは、句構造に適用されるものである。この観点で併合を吟味すると、内部併合の際には、外部併合にはない「Xの中を見る」という操作をYを捜す時に行っており、派生の以前の段階にも依存するという性質は依然として残っていることがわかる。この点で、未だに句構造規則と変換規則を併合によって完全に包摂できたとは言いがたい、これから研究課題と言えよう。

は言い難く、これからの研究課題と言えよう。

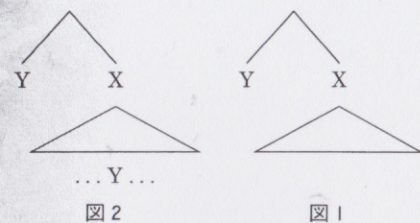


図1

図2

ここで述べる事が出来なかったことの中にも、強生成能力と弱生成能力、形式的普遍性と実質的普遍性、文法と形式言語理論との関わりについてなど、生成文法を理解する上で重要な事項が詳しく議論されている。さらには、変換規則には、二項枝分かれ構造を多項枝分かれ構造に変換し、構造の複雑さを減らす役割があるのではない

かという示唆など、今日的視点から見直す興味深い指摘も多々見られる。以上のように、『諸相』が、生成文法とはどのような学問なのかを理解する上で、現在でも変わらぬ価値を有することは言うまでもない。生成文法研究に従事する者にとって、最新の研究成果に精通することも重要であるが、『諸相』での議論を顧みて、これから進むべき方向や取り組むべき課題を考えることも有益ではないだろうか。

（明治大学文学部／理論言語学）

【邦訳】

『文法理論の諸相』安井稔訳、研究社、一九七〇。

【関連図書】

今井邦彦編「チヨムスキー小事典」大修館書店、一九八六。
田窪行則・稲田俊明・中島平三・外池滋生・福井直樹「言語の科学6 生成文法」岩波書店、一九八六。生成文法の基本的考え方を解説し、初期の「標準理論」から最新の「極小モデル」までを紹介している。
チヨムスキー「生成文法の企て」福井直樹・辻子美保子訳、岩波書店、二〇〇三。一九七九、八〇年と二〇〇二年に行われたインタビューを収録したもので、チヨムスキーが自らの科学観と言語観を、比較的平易に、そして詳細に述べている。